JMSCA 登山月報 第598号 平成31年１月15日発行
昭和45年12月12日第三種郵便物認可（毎月一回15日発行）

登山月報

黎明のシニオルチューを望む

明けましておめでとうございます　会長　八木原圀明 …… 2
平成30年度安全登山指導者研修会（西部地区）報告 …… 3
平成30年度自然保護委員総会実施報告 …… 4
ＵＩＡＡ登山部会ブダペスト会議を終えて …… 5
第８回日本山岳グランプリ …… 6
第122回 Mountain World …… 7
新連載『日山協と私』 …… 8
UIAA MedCom Meeting 報告書 …… 10
JMSCA、寄贈図書、表紙のことば、編集後記 …… 12

No.598 新春号

明けましておめでとうございます

会長　八木原圀明

明けましておめでとうございます。今年も日本中の登山愛好者、スポーツクライミング愛好者の皆さんが安全で楽しい登山、クライミングを続けられますようお祈りいたします。

「時代の変わり目」

日本の社会状況が激しく移り変わる中、私共の登山・クライミングの世界も影響を受けざるを得ません。すでに10年前に人口減社会に入り、経済も縮んで行くそうです。その変化に対応、対処するにはどうすべきかに日々悩んでいます。これまではこうだった、これまではこうやって来たから、ではどうにもなりません。時代に真っ正面から向き合わなければ置いて行かれるのは必定です。

老いも若きも組織への入会拒絶。思い切ったアイディアを実行しなければ将来はありません。「山の日」も浸透し始めました。「山登り」を再び隆盛へと導き登山界が、登山者が大同団結しなくては、じり貧になります。一緒に変わりましょう。

「東京オリンピック・パラリンピック」

あと約１年半後にはいよいよ２度目の東京オリンピックが参ります。現在、日本のスポーツクライミング選手の皆さんの頑張りは各種の国際大会でも上位に入賞し、五輪入賞の期待はますます高まりますが、それはボルダリングとリードの場合です。スピード種目が入り、３種目複合の「コンバインド競技」となると話は違って来るようです。選手も強化委員会も必死になっています。期待し、応援して参りたいと思います。

「機械に負けずに」

日本の登山愛好者人口は800万とも900万とも言われますが、登山界の組織率は１パーセント未満。これが組織登山者の実態です。会員の超高齢化、昨今20～30歳代の登山者の増加は間違いありませんが、その若い人達の組織離れは登山界の深刻な問題です。

登山界を築き、支えてきた山岳会の実力が落ち、人に代わって（?）スマートフォンなどを使っての仲間作りや安全までも確保しようという動きが加速する時代。我々世代の登山者では考えられない時代を迎えているのは事実です。積極的利用で安全と仲間の確保を。

「心配、課題は無限に？」

山岳事故、遭難の増加、シカなどの捕獲数減で食害が増大しているという山の環境。オーバーユース問題、同じ山、コースへの集中は登山道浸食。使われないコースは廃道同然か廃道へ。し尿処理、トイレ整備問題、一人用テント激増でキャンプサイトが足りなくなる？

外国人登山者の急増。インバウンドと言い、国を挙げて外国人観光客を増やそうとしている中で、ますます増えるのは間違いなく、日本経済的にも必要とし、政策として推進している。昨年12月には「訪日客が初めて3000万人を超えた」と大きなニュースになり、2020年には4000万人にしたいという。もう私の頭では処理不能。

「積極的な情報発信を」

私ども協会としてもＷｅｂサイトで数ケ国語での日本の登山ガイドというか、安全な日本の山登りの仕方を伝える用意をしているが、なかなか進んでいないのが実情である。登山界だけでは難しい、行政と一緒になって推進する必要があります。

「日本山岳・スポーツクライミング協会？」

誇大広告はいけませんが、私ども日山協はどうも宣伝・ＰＲ下手です。せっかくの情報も多くの非（未）組織登山者を含めて社会や登山界へのアピールが足りない感じがしています。協会の存在すら知られていない？

もっともっと情報発信を丁寧に、積極的にして行く必要があります。全てをスピーディーに進めなくては手遅れになります。アイディアを、力をお貸し下さい、とお願いをして新年のご挨拶と致します。本年もよろしくお願い申し上げます。

平成30年度安全登山指導者研修会（西部地区）報告

11月17日（土）～19日（月）の３日間にわたり、沖縄県名護市の県立名護青少年の家と名護岳において平成30年度安全登山指導者研修会（西部地区）が開催された。昨年までは「中高年安全登山指導者講習会」として開催してきたが、本年度からより幅広い登山者層の安全を図ることと、参加者が地域・組織において今後の活動に活かせるよう「講習会」から「研修会」へと名称、形式ともに変更された。沖縄県での当該講習会・研修会の開催は初めてであり、これで全国すべての都道府県で開催されたことになる。

参加者は、熊本、香川、宮崎、広島、佐賀、山口、福岡、岡山、徳島、兵庫、鹿児島、栃木、沖縄の13県から24名（男21名、女３名）が参加し、主催者、講師、スタッフを合わせると総勢55名となった。

研修内容は「登山界の現状と問題点」、「山歩きのための読図とナヴィゲーション技術」、山での「応急手当と搬送」と亜熱帯の地理的特性「沖縄やんばるの自然」を中心とした内容であった。

第１日目は開会式の後、講義Ⅰとして小野宏治氏（環境省やんばる自然保護官事務所上席自然保護官）と上開地広美氏（同自然保護管補佐）による、亜熱帯地域である沖縄やんばるの森の成り立ちと特性、貴重な多種多様の動植物の生態系の説明があり、やんばるの森の保全を図る取り組みが紹介された。

引き続き講義Ⅱとして村越真氏（静岡大学教授、国立登山研修所専門調査委員）の「山歩きのための読図とナヴィゲーション技術」の講義があり、独自の収集分析による数値で、山岳遭難の多数を占める道迷いが中高年より若年層が多いこと、又、高山より低山の道迷いが圧倒的に多いことが紹介され、このような山岳遭難を防ぐための読図のスキルの体系として移動前の「プランニング」、「先読み」、移動中の「ルート維持」、「現在地把握」

開会式　主催者挨拶

など、基礎的で重要なことの説明があり、その後グループに分かれてそれぞれのテーマについて討議、発表がなされた。

研修会２日目は施設前広場に集合し全体の記念撮影後、実技研修Ⅰとして、「読図とナヴィゲーション技術」を村越真氏による全体説明の後、６名ずつのグループに分かれ名護岳における「コンパスと地図による実施研修」を行った。実施研修は10か所のポイントでクイズ形式の設問を設け参加者に回答してもらい、又、分岐ポイントごとにコンパスを使っての「現在地把握」と「ルートの先読み」を研修した。

下山後、引き続き施設前広場において、実技研修Ⅱ「応急手当と搬送」を名護市消防本部職員指導の下、「傷病者搬送方」、「外傷者の対応」を実施研修した。傷病者搬送では、一人抱え搬送、二人搬送、ザック搬送、衣服搬送など参加者全員で実施した、外傷者の対応では骨折の固定方、三角巾の使用方などを実施した。

最終日は講義Ⅲとして北村憲彦氏（名古屋工業大学教授、国立登山研修所専門調査委員長）の「登山界の現状と問題点」の講義があり、最近の山岳遭難の約40％が道迷いであること等、遭難事故の現状が説明された。登

研修会　記念撮影

実技Ⅱ　レスキューその２

山界の問題として他力本願で自立していない登山者の増加、登山の基礎的な知識、意識の低い登山者の問題等を挙げ、登山客から自立した登山者へ、ＰＤＣＡによるタフな登山パーティ、ダメージコントロール（システム）を掲げ、解決、方法を示して「なくせる遭難をなくそう」と説明された。

最後の研究協議は北村氏、村越氏の講義を交えた進行により、研修会全体を通した内容を研究討議（グループ毎）によって整理し、発表することで内容の理解を深め、指導の目的や手段、方法について話し合い、閉会式に移り、修了証授与、講評、来賓挨拶、閉会となった。

今回の研修会場は空港のある那覇市からは交通が若干不便であるが、小さな山にしては変化にとんだ名護岳とその入口にある名護青少年の家を研修会場に選んで実施した。

沖縄県山岳連盟としては初めての研修会ということで不安なこともありましたが、幸いにも天候にも恵まれ、事故もなく安全に研修会を終了することができました。これも偏に参加者の皆様や関係各位のご協力の賜物と厚く御礼申仕上げます。本当にありがとうございました。

（沖縄県山岳連盟　副会長　稲福政賢）

平成30年度自然保護委員総会実施報告

平成30年度自然保護委員総会（第42回山岳自然の集い 中央大会）が、11月23日（金・祝）～11月25日（日）、埼玉県立小川げんきプラザで、22都道府県から75名を集め開催した。今回の開催は常任委員などからなる20名の実行委員会制で運営された。開会に先立って、参加都府県の自然保護委員長を集めた委員長会議も開催し、総会の前哨とした。第１日目には、開会式、総会（委員会事業報告）と基調講演を、第２日目にはセッション１（都道府県活動報告）とセッション２（パネル討議）が行われた。第３日目にはオプションとして視察登山を行った。

（第１日目）

13：20から開会となり、冒頭に行われた主催者挨拶で亀山健太郎副会長から、「トレラン等で登山以外に山の利用が多様化したことで、山の自然への負担が過大となり、持続可能な利用に向けた活動には相応の労力やその裏付けとなる経済負担が求められる。ここに集まっている方々もボランティアでやっていることと思う。それを長続きさせるには、我々はファンド等で資金を集める必要があるだろう。自治体や各種団体の理解を求めながら続けていきたい。また、若い人が入ってこないと活動がとまってしまう。できるだけ、次世代へ繋げられるように活動を続けて行きたいと思う。意見を出し合って、次の世代に残せる活動を続けてもらいたいと思う。」と期待感を込めた挨拶を行った。

引き続いて、松隈自然保護委員長から、「今総会のテーマの『未来につなごう、みどり豊かな山の自然』を強調して、集まった方々の意見交流を通して、複雑化する山の環境問題に対し、打開策を模索頂き、活動の輪を広げていって頂きたい。」とした。

さらに、開催地の小川町から髙窪剛輔副町長の歓迎の挨拶を頂き、田中文男顧問、坂口三郎顧問からそれぞれ自然保護活動の激励の言葉を頂き、開会式を閉じた。

開会式の後、清水武司氏（秩父山岳連盟会長から）から「武甲山　頭部を落とされ、皮削がれ無残な山容をさらし続ける山」を演題として約１時間の講演を拝聴。セメント産業の採掘で大きく掘削され続けて山容が激しく変化した武甲山の事情と、そこに生き続ける自然について、地元の登山愛好家の目で見つめてきたことを、熱い感慨を込めて語られた。

次いで、日山協自然保護常任委員会の事業報告、本年度から適用となった新規程に基づく委員会の体制、自然保護指導員の登録状況のそれぞれについて説明、総会議事を終えた。

（第２日目）

午前中行ったセッション１において、参加都道府県の夫々から１年間の活動報告が行われ、自然保護活動やその動向が熱く語られた。

ついで、午後行われたセッション２のパネル討議では、①次世代育成の実例と課題（パネル：増田 修 常任委員）、②山岳トイレについて（パネル：田上 正敏 常任委員）、③ 登山道問題について（パネル：岡田 博之 専門委員）、④ 希少動植物の保全（パネル：小林 貞幸 常任委員）を取り上げた。

「次世代育成の実例と課題」では、子供達の自主性の重点とした自然の中での活動プログラムの重要性が説かれた。「山岳トイレについて」では、日山協作成の「置き去りにしないで山のトイレゴミ」と題するパンフを引用して携帯トイレの利用促進をパネルから提示、北海道（利尻・知床・大雪のトイレの事情）や東京から奥多摩小屋廃止に伴うトイレ問題の実情を報告。「登山道問題について」では、巻機山や飯豊連峰や伯耆大山の再生事情を話題に挙げた。また、ストックのゴムキャップの功罪についても触れた。「希少動植物の保全について」では、長野からライチョウの保護のボランティア活動状況、山梨での希少植物の保護活動状況を話題に挙げた。

（第３日目）

希望者のオプションとして、武甲山と大霧山の視察登山を行った。前者では、武甲山表参道往復で昨日の講演の復習を実地体験した。大霧山では、疲弊した登山道の状況を視察した。全員無事下山し、総会の全日程を終了した。　　（自然保護委員長　松隈　記）

UIAA登山部会ブダペスト会議を終えて

ＵＩＡＡ登山部会（Mountaineering Commission; MountCom）の秋期定例会議が2018年11月10日～11日に、ハンガリーの首都ブダペスト（Budapest）で開催された。会議はハンガリー山岳スポーツクライミング連盟（Hungarian Mountaineering and Sport Climbing Federation）が主催し、12ヶ国15人の参加者があった。なお、当連盟はＵＩＡＡのPeter副会長の経営するTSPC Ltdを借りて、Iidiko Kandvacs会長の下、会員数1200人と小規模で活動している。

1. 残念な報告とお詫び

非常に残念であるが、本年ＵＩＡＡ総会で、イタリア山岳会ＣＡＩ（Club Alpino Italiano）がＵＩＡＡメンバーから外れた。そのため、ＵＩＡＡの登山部会委員長であるＣＡＩのクラウディオ氏（Claudio Melchiorri）は委員長を辞職せざるを得なくなった。ロボット工学の専門家として、日本の東北大学や神戸で共同研究による長期滞在経験がある親日家であるだけに、惜しまれる。結局、本人からは、当会議寸前にＵＩＡＡへ辞職届けを出した事が伝えられたが、前回のリスボン会議（2018. 4）、今回ブタペスト会議に顔を見せないまま、去って行った。何とも、現在ヨーロッパを吹き荒れている複雑な政治事情を見る思いである。

今回のMountComの会議には、専門法律グループ（代表1名参加したが活動無し）や倫理グループの出席もほとんどなく、Steve氏を代表とするTraining Panel（登山教育グループ）だけの集まりとなってしまった。そのため、次期委員長を選出することができず、次回セルビア会議まで延長されることが決まった。

加えて、本来、議事録にそって進められるＵＩＡＡに関する一般報告や主催団体の活動報告もなく、筆者の準備したプレゼンの機会もなく、参加者全員の集合写真さえなかった。Training Panelにおける内部活動に関する議論に終始したため、会議内容に関しては報告することもできず、この紙面をお借りして深くお詫びしたい。

2.「夏山リーダ」のUIAA認定への取り組みとその背景

幸い、Steve氏と個別にＵＩＡＡ Training Standard標準化教育の認定への取り組みにむけた打ち合わせができた。日山協では、指導委員会、遭対委員会合同で、従来の指導員制度から、新しく「夏山リーダー（日本スポーツ協会名称；Start Coach）」を発足させ、このＵＩＡＡ認定を受けようとするものである。

前回も紹介したが、長い歴史のあるＪＳＰＯと日山協による指導員制度があるにも関わらず、何故あえて、ＵＩＡＡ認定を受ける必要があるのか、疑問を持たれる人が多いと思われる。ここで、ＵＩＡＡ標準化教育の資格認定制度について、少し紹介しておきたい。

我が国の登山教育は様々な登山関連団体で実施されてきた。その特徴は、それぞれの教育組織、あるいは指導者によって、登山経験・知識に基づいた独自の工夫がなされた教育が実施されてきたことである。しかし、一方では、この長所によって、指導内容にバラツキが生じやすく、指導者によって同一内容でも異なる登山技術・知識が教えられる問題を抱えてきた。加えて、評価方法も、受講経験のみを重視する傾向が強く、十分な評価ができていないと言われてきた。

このような問題が生じた背景には、登山教育が第三者による外部評価を受けてこなかったことが大きいと考えられる。

そこで、日山協では、国際的な登山教育の第三者評価機関であるＵＩＡＡ Training Panelによる認定を受ける

ことで、国際的に認められる質の高い登山教育を目指すことにした。「夏山リーダー」のＵＩＡＡ認定への取り組みは、その出発点となる。

なお、ＵＩＡＡ認定を違う角度から理解する上で、よく似た認定組織に、我が国の多くの工学系大学を中心とした技術系高等教育機関で採用されている、日本技術者教育認定機構（ＪＡＢＥＥ）がある。ＪＡＢＥＥ認定された教育機関を卒業すると、優秀な技術者であることを第三者が保証することになる。そのため、ＪＡＢＥＥ認定学科を卒業すると、就職が有利になる、技術士補が与えられるなどのメリットがあるが、ＵＩＡＡ認定でどのようなメリットができるのかは、今後の資格保有者の活躍次第であろう。

3. ＵＩＡＡの認定のための審査の特徴

最後に、ＵＩＡＡ標準化教育の認定法の概要を一部紹介しておきたい。

ＵＩＡＡ認定では、WalkingからAlpineまで、活動目的に応じて分けられているが、挑戦するのは、第１段階Mountain Walking and Trekking（Summer）、夏期一般登山である。、日帰り山行から安全のためロープを用いる急斜面での登山（クライミングは含めない）も含めて、歩行型登山のグループリーダーへの指導・養成能力が審査される。

「夏山リーダー」指導において、以下に示す条件項目に対し、リーダーとしての技術や能力を習得・訓練する指導法となっているかを調査する。

まず、急斜面から尾根・谷、雪で覆わた場所での登り・下り・トラバース能力。基本的なロープワーク、ルートファインディングとナビゲーション、グループの編成と登山計画作成、リーダーシップ、キャンプとビバーク、問題の回避と解決、緊急時の対処、ファーストエイドなどである。

一方、以下の登山知識レベルについて、登山知識のアドバイスを行えるリーダーとしてのレベルに達する指導法かどうかを調べる。

ゆったりと時間をかけてエベレストを仰ぐ展望台へ。
エベレスト・カラパタール
登頂トレッキング 20日間
発着地 東京・大阪・名古屋・福岡
出発日 3/8（金）・4/19（金） 旅行代金 526,000円
※燃油サーチャージ（2018年12月20日現在：日安約19,000円～28,000円）が別途必要です。
旅行企画・実施 観光庁長官登録旅行業第490号／日本旅行業協会正会員／ボンド保証会員
アルパイン ツアーサービス 株式会社
本社 〒105-0004 東京都港区新橋3-2-5（第5東洋海事ビル4階）☎03-3503-1911
大阪☎06-6444-3033 名古屋☎052-581-3211 福岡☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

疲労、低体温症、凍傷、熱中症などを認識し、処置法を知っている。危険を引き起こす地形と天気。登山計画の作成、ルート選択とグレイディング。キャンプと山小屋泊、栄養、運動生理とケガ予防。緊急時の対処。自然保護と持続可能な取り組み。アクセス問題。法的責任と山岳保険。トレーニングなどである。

審査内容から見る限り、習得すべき内容項目には日山協が今まで実施してきた指導員制度から大きくかけ離れた目新しいものはない。しかし、様々な山域、環境条件において、確実に生かせるだけの登山技術・知識、つまり実用的な対応能力を確実に習得しているのか、さらなる審査の正確性・厳格性があると感じている。

（遭難対策委員会常任委員　青山千彰）

第8回日本山岳グランプリ

第８回日本山岳グランプリは、長野県松本市在住の馬目弘仁氏に決定した。馬目氏は、1969年３月、福島県いわき市生まれ。日本を代表するアルパインクライマーで、独自のスタイルで日本の冬壁の可能性を追求して〝Japanese Style〟を提唱する。高校山岳部に入部し、クライミングに嵌る。信州大学進学と同時に松本Climbing Mate Clubに入会。現在は信州大学学士山岳会に所属。国内で数多くの新ルートの開拓や初登記録を残し、海外では、バギラティⅡ峰南西ピラー（94年）、メルー峰シャークスフィン（06年）、テンカンポチェ峰北東壁（08年）、キャシャール南ピラー（12年）などの記録を残す。キャシャール南ピラー初登攀は、2012年の第21回ピオレドール賞（仏）に輝いた。

07年冬に英国ＢＭＣの国際ウィンター・クライマーズミートに参加した後、その思想を国内でも実践しようと、ウィンター・クライマーズ・ミーティングを開催。国内の現役クライマーを集め、一緒に冬壁を登り、技術の研鑽や交流を図る。その結果、多くの日本人クライマーが近年、海外の山々で多くの結果を残すようになってきた。これら長年に亘って後進を牽引されてきた多大な功績に対してグランプリが贈られた。

第122回 Mountain World

Ｋ２ 最後の冬季未踏峰を目指す試み

池田常道

昨年の１月号から３月号にかけて冬のＫ２（8611 m）とナンガ・パルバット（8126 m）挑戦の話題をお伝えしたが、今季もまたこの２座が注目されている。

1980年２月、エヴェレスト（8488 m）が初めて冬に登られて以降、8000 m峰の冬季初登頂はもっぱらポーランドのクライマーによって成し遂げられた。すなわち、84年マナスル（8163 m）、85年ダウラギリ（8167 m）とチョー・オユー（8188 m）、86年カンチェンジュンガ（8586 m）、87年アンナプルナ（8091 m）、88年ローツェ（8516 m）である。

この間ポーランド隊はＫ２（8611 m、88年）やマカルー（8485 m、88年、91年）、ナンガ・パルバット（89年、91年、97年）にも挑戦を繰り返した。世の人々は彼らをアイス・ウォリアー（氷の戦士）と呼んで讃えた。しかし、精強を誇ったポーランド登山界も、経済の悪化から強力なナショナル・チームを編成する余力を失っていった。後半の２座ではイェジ・ククチカやクシストフ・ヴィエリツキといった個人の活躍によって、かろうじて面目を保ったものの、往時の勢いは見られなくなった。

潮目が変わったのは2005年、イタリアのシモーネ・モーロが、まだ冬の登頂を許さなかったシシャパンマ（8027 m）に登ってからだった。彼は前年に引き続いて挑み、ポーランドのピョトル・モラフスキと頂上を陥れた。モーロは2009年、カザフのデニス・ウルブコと組んでマカルーにも登り、ポーランド人を含まない隊で初めての8000 m峰冬季初登頂を果たした。

この時点で、冬季未踏の巨峰はパキスタンの５座に絞られた。Ｋ２を初めガシャブルムⅠ峰（8080 m）とⅡ峰（8034 m）、ブロード・ピーク（8051 m）、そしてナンガ・パルバットである。このうちガッシャブルムⅠ・Ⅱ峰は冬に挑戦されたことがなかった。モーロとウルブコは2011年、アメリカのコートニー・リチャーズを加えてⅡ峰の冬季初登頂にも成功した。

一方、ポーランド隊は、2012年にガッシャブルムⅠ峰、13年にブロード・ピークに登って往年の栄光を取り戻しつつあった。ナンガ・パルバットは2007年以降大小のチームが挑戦を繰り返した末、2016年にモーロとアレハンドロ・チコン（スペイン）、ムハンマド・アリ・サドパラ（パキスタン）が凱歌を挙げたことは、同年３月号に書いたとおりだ。

さてＫ２は、88年のポーランド隊を含めても。まだ４回しか試みられていない。88年は南東稜の7350 m、2003年はポーランド＝カザフ隊が北稜の7680 m、13年はロシア隊が南南東リブの7200 m、昨年はポーランド隊も南東稜の7600 mで敗退している。

今季は、ワシリー・ピフツォフ隊長のロシア＝カザフ＝キルギスの旧ソ連三か国合同隊と、チコンの率いるスペイン隊が、ネパール・シェルパ５人と共に挑むが、過去３回の挑戦でいずれも最高到達点を記録しているウルブコは、前回明らかになった、登山作戦に対する批判的言動のせいか、今季はどのチームにも含まれていない。その代わりガールフレンドを伴って、パタゴニアの夏を楽しんでいるようだ。目標はセロ・トーレに新ルートを拓くことだという。

旧ソ連三か国合同隊はロシアのアルチョム・ブラウンをオーガナイザーとし、カザフのワシリー・ピフツォフ隊長の下に10人の隊員を擁して南東稜に向かう。酸素は使わないが、伝統的な包囲戦術で挑む。ブラウンは、早くから「民主主義は隊の総力を弱める」と宣言し、ウルブコの参加を好まない姿勢を示していた。

一方チコンは、ナンガ・パルバット冬季初登頂を果たした後に２年続けてエヴェレストに行き、冬季初の無酸素登頂を企てた。彼に同行したシェルパ５人の雇い主セブンサミット・トレックスは、３度目の挑戦を冬季初の公募隊形式でやらないかと提案、５人のクライアントを募集した。ところが、チコン自身が公募隊という形式に難色を示し、３か月前に許可を取っていたＫ２に鞍替えしたうえ、クライアントも二人がキャンセルしたため、「冬季初の8000 m公募隊」は来年まで延期となった。

チコン自身は2016年にＫ２北東稜からのＫ２冬季初登頂を構想したことがある。デニス・ウルブコと組んで、新疆ウイグル自治区側から1978年アメリカ隊ルートをたどろうとしたものだったが、あいにく新疆側の政治情勢悪化によって自治区登山協会が許可を出すことができなくなりナンガ・パルバットに変更、モーロらと協力して冬季初登頂を手に入れた。

昨年ウルブコも強調していただが、東面は冬の強風を避けられ積雪も豊富なので、雪洞を利用するなど、テント地が限定される南面より有利だという。

新連載 ～創立60周年に向けて～(8)

『日山協と私』

千葉県山岳連盟　島村　光昭

私は、長年にわたり日山協の国体山岳競技に参加してきました。この機会に国体山岳競技を主に国体に携わった方々との関係も回想することにしたい。私にとって日山協との出会いもやはり国体山岳競技であった。昭和33年に開催された富山国体に千葉県の選手として出場したのが約60年前のことである。

1．山岳会の入会と東京岳連の講習会

私は、昭和30年頃から本格的に登山をはじめ、翌年千葉岳連に加盟している市川山岳会に入会した。当時友好団体でもあった東京の山岳巡礼倶楽部の高橋定昌代表と面識ができ、東京岳連の富士山冬山技術講習会や三ツ峠岩登り講習会に参加している。講習会は、高橋定昌本部長に、羽賀正太郎さん、斎藤清太郎さんなど全岳連のそうそうたる方々であった。高橋定昌さんは昭和35年の熊本国体では競技委員長となり、その後、６年間委員長を重任されている。また高橋定昌さんとは縁があって、昭和42年千葉岳連の「ヒンズークシュ・ティリチミール７,706ｍ」登山隊に参加している。

2．第13回富山国体（昭和33年）

富山国体の山岳競技は、オープン種目として一般のみ参加で３,000ｍ級での開催は初めてであった。登山コースは、４コースあり、Ａ・Ｂコースは剱岳をＣ・Ｄコースは立山を登るもので、千葉県チームは、Ｂコースの剱岳に登り、大日岳経由で下山した。後日の話であるがＡコースの監督が渡渉中増水した沢に転落し、流されたが自力で這い上がり重大事故にならなかったのは幸いであった。特に国体山岳競技では十分な事前準備と安全対策が必要であることを痛感した。

3．第28回千葉国体（昭和48年）

千葉国体は、清澄山・鋸山山系において開催された。私は、Ａ隊の県内ＳＬを担当し、今後の踏査競技を考えてＡコースでは読図歩行を採用した。千葉国体では、特に多くの大会役員が交代し、私共現役委員と身近な方々が就任した。鎌田久副会長、秋葉忠男競技委員長、坂口三郎技術委員長、Ａ隊ＳＬ太田忠行さん他の方々で私にとっても国体山岳競技の運営や競技の内容について初めて経験し大変有意義な国体であった。

4．第38回群馬国体（昭和58年）

群馬国体は、武尊・尾瀬山系を主な会場で行われ、競技の内容では、登攀競技の審査内容を詳細に規定したほか、踏査競技では一部のコースを帯状に公開した。私は、踏査競技Ｓ１の主任審判員を担当することになったので、会場地の調査に重点をおいたが会場地が広く多くの日数を要した。一方競技運営の方は、瀧島清競技委員長、坂口三郎審判長、競技運営の要となる太田忠行競技部長、中央総務委員には経験豊富な方々が就任され競技も順調に終了した。

5．第41回山梨国体（昭和61年）

山梨国体は、南アルプスの前衛山域において開催された。この国体では、競技規則などでは大きな変更点もなく、幕営審査の廃止など一部の変更のみとした。私が競技委員長に初めて就任し、競技の運営は緊張の連続であったが、幸い前任者の澤村幸蔵さん、瀧島清さんなどから適切なアドバイスをいただき任務を遂行することが出来た。

6．第43回京都国体（昭和63年）

京都国体は、北山山域において開催された。京都国体は２巡目の第１回大会として国体常任委員が総力を挙げて取り組み、京都岳連の清水朝一理事長や全国国

富山国体千葉県選手

群馬国体S1行動役員

体委員の協力を得て競技規則などほぼ目的通りの改訂を行うことが出来た。主な内容は、次の通りである。○種別順位決定方式○実競技日数３日○男子の編隊数２隊○縦走など３種目の審査基準点配分変更○中央総務委員数４名などである。大会役員は、鎌田久会長、私が競技委員長、柴山勝士審判長、中央総務委員瀧島清さん、太田忠行さん他であった。競技の方は、大幅な改訂の割には順調に推移した。２巡目の大会としては成功したものと思われる。

7. 第44回北海道国体（平成元年）

北海道国体は、羊蹄・ニセコ山系において開催された。特に秀峰羊蹄山はじめニセコ連峰は、北海道を代表する地域の一つでこれほど広大な競技会場は他にはない。競技の方は、前年２巡目の第１回大会で大幅な改訂を行ったが、意外と競技は順調に推移し、安心した。残念ながら競技３日目悪天候となったが各選手の頑張りにより予定通り終了することが出来た。

8. 第45回福岡国体（平成２年）

福岡国体は、背振山系において開催された。私にとって結果的には最後の競技委員長となった。鎌田久会長はじめ多くの先輩・後輩方が大会役員として参加する中での競技運営であった。競技は、登攀競技に国体では初めての人工壁の採用と登攀ルートを２ルートとすることであったが、関口寿一主任審判員がうまく采配したので予定通り終了した。

9. 第46回石川国体（平成３年）、第47回山形国体（平成４年）

石川国体は、白山山系で開催された。競技の中では、天気図、読図票の正解を即時公開した。大会役員として初めて斎藤一男会長が就任し、岡本安夫競技委員長、水野金太郎審判長であった。中央総務委員は、柴山勝士さん、関口寿一さんら若手の役員が中心となり

福岡国体本部役員

競技の運営にあたって、順調に閉会式を迎えた。

山形国体は、飯豊山系で開催された。石川国体同様競技の改訂は少なかったので、比較的スムーズな競技運営となった。また、初めて沖縄県成年男子チームが参加した。競技委員長は、前年に引き続き岡本安夫さん、関口寿一審判長でこの他、地元山形岳連の清野孝さんなどが運営にあたった。私は、前年に引き続き中央総務委員となった。

10. 第55回富山国体（平成12年）

富山国体は、縦走が金剛堂山他、登攀は桜ケ池登攀会場、踏査はたいら他で開催された。登攀会場は、新設された立派な施設であった。競技の方は、踏査競技成年男子（Ｓ１）の判定について、監督からの抗議を受けて回答したが納得せず、混乱した。坂口三郎会長、原一平競技委員長、新堀昇審判長他で、私はこの大会の中央総務委員を最後に国体関係の役職から退任することにした。

私は、群馬国体開催年から２回目の富山国体開催年まで18年間国体常任委員を続け、その中で常任委員長は、沖縄国体競技中止年を含む５年間在任した。この間競技種目は、３種目の開催は続いたものの踏査競技は、次第に問題が山積していき競技性が薄らいだ。山岳競技の変遷には、多くの議論があったが時代の流れに沿って結果としてスポーツクライミングに集中し、一本化していった。

栃木県山岳・スポーツクライミング連盟の創立70周年記念式典・祝賀会が12月８日（土）に宇都宮市のホテルニューイタヤで開催された。

山梨県山岳連盟の創立70周年記念式典・祝賀会が、12月15日（土）に甲府市のアーバンヴィラ古名屋ホテルで開催された。

UIAA MedCom Meeting 報告書

2018年11月20日、ネパール、カトマンズのYak and YetiホテルでUIAA MedComミーティングが開催された。増山茂前医科学委員長が諸事情のため欠席し、Diploma in Mountain Medicine（ＤｉMM）管理グループの会合に出席するためカトマンズを訪れた上小牧憲寛が代わりに出席した。以下、MedComミーティングで話し合われた内容を記載する。

1. 承認事項

George Rodwayが会長職を辞することになったが、今後も米国UIAA MedCom代表およびDiploma in Mountain Medicine（ＤｉMM）管理グループ代表にとどまる。新しい会長を選ぶか否か採決し、10名が採決に参加し、全員が賛成した。David Hillebrandtが副会長として新しい会長の選挙を組織する。3か月以内に新会長と副会長を再選する。候補の推薦期限は2018年12月21日とする。

2. 議　事

1）キリマンジャロの捜索と救助

Gerald Dubowitzがキリマンジャロの捜索と救助の医療指揮者として語った。キリマンジャロはＭｅｄＣｏｍの大きな関心事となって来た。高山病の疾病率と致死率が驚くほど高いが、信頼できる公式の人数が発表されていない。非公式には年間５万人の登山者のうち6000－8000人が避難させられている。タンザニアに住んでいるデンマークの登山家、企業家であるIvan Braunによって公式に調査された。

キリマンジャロの捜索と救助は営利目的の組織によって2018年に組織された。彼らの視点はキリマンジャロをアフリカで最も安全な旅行目的地にすることである。彼らの仕事はヘリコプターを捜索救助に導入してキリマンジャロの皆（ポーター、コック、ガイド、旅行者）の安全を確保することである。さらに彼らは観光と急行便のフライトを運行して、空からキリマンジャロとタンザニアにアクセスするのを容易にする。株主の大多数は地元タンザニアの投資家で、デンマークの親組織に補完してもらう。キリマンジャロ慈善財団法人が確立されつつある。捜索救助飛行は全て親の保険会社の保証を受け、（ガイド、ポーターなどに対する）究極的に自由な救助をその組織がサポートする。今までキリマンジャロの捜索救助はいくつかの大きな国際保険会社によって成功裏に所有されて来た。

その会社／基金はレンジャーとガイドにトレーニングを供給する。現在のところ8000人のガイドのうち349名が基本的な捜索救助トレーニング（ヘリコプターの安全、トリアージ、山のファーストエイド、ポータブル高圧室の使用法）を受けた。

医療スタッフが高所医学、へき地と旅行医学を専門とするクリニックを運営する。そのクリニックには、国際的ボランティアによってトレーニングされサポートとアドバイスを受けた地元タンザニアの医師が務める。国際ボランティアはＤｉMMかそれ値する資格を持っていることが求められる。全ての時間地域をカバーする専門家によるグループから更なるサポートを受ける。

エアバスＡＳ 350 Ｂ３ヘリコプターがMoshiに置かれる。飛行時間は約30－45分である。このヘリコプターは特に狭い地域での経験が非常に豊富な南アフリカのパイロットによって運行される。

次いで質疑応答が行われた。

John McCall 「病気の人はどうするのか。彼らはどこへ行く？」

Gerald Dubowit 「クリニックには高山病の治療器具を用意してある。必要があればナイロビに救出する。そこには良い医療機器がある。または患者に余裕があれば帰国させる。非常に良い医療機器を積んだＡＭＲＥＦ救出機を使用する。」

Thomas Küpper 「パイロットは高所運行の機器を持っているのか。」

Gerald Dubowit 「パイロットはＣＡＡの規則に従った内的酸素アクセスシステムを持つことを法的に義務付けられている。けれどももしヘリコプターが山の上で故障した際は、酸素は時としてなくなってしまう。我々はこの問題を解決する方法をいくつか模索している。」

David Hillebrandt 「そのコースをＵＩＡＡは手助けすることができるのですか。」

Gerald 「はい、我々のコースが国際基準に合致することを認めてもらおうとしています。ＩＣＡＲとも同様の関係を保てば、我々のパイロットに山の飛行の専門技術と経験を提供できると考えている。」

Herman Brugger 「貨物飛行も考えていますか。」

Gerald Dubowit 「いいえ、貨物と救助は利益相反を生む。我々は観光飛行とトレッカーを降ろすための飛行を提供する。」

Steve Roy 「貨物飛行はパイロットにとってトレーニングの機会となり得るのではないか。」

Hermann Brugger 「確かに。しかしそうすると利益の薄い救助飛行より貨物飛行の方が優先される可能性

がある。」

John Ellerton 「1日に何回飛んでいるのですか。」

Gerald Dubowit 「現時点では1日最高12回。夜間飛行なし、空中給油なし。今シーズンは150 - 200人の患者搬送を行った。総計6000名強の救助が行われたので、ヘリ救助の人数は増加すると思われます（我々は現時点では新入りですから）。けれども、救助サービスの増加よりも予防に焦点を当てるつもりです。」

2）ICAR

［John Eleerton、skypeを使用してJason Williams］

管理グループによるＤｉＭＭ規則の更新。前回の更新は2015年、BolzanoでのISMM World conferenceの後だった。その更新は小さな変更を含み、そのほとんどは時間をかけてそのプログラムの頑健性と質を確認するための再認可であった。ＤｉＭＭ管理グループは地域の文化的、言語的、教育形式を評価し続ける。Oliver Reistenは最近特別教程ヘリコプター救助を53時間に増加することを提唱した。管理グループがこの件を今後数週間にわたって検討する予定である。

3）ウェブサイト［Peter Bourne］

Rianne van der SpekがGeorgeと連絡を取って規則の2018年更新と一致するＤｉＭＭページの更新を行う。すべてのコースを一覧表にした文書は、最近確立されたものを含め更新する必要がある。

4）糖尿病の文書［David Hillebrandt］

ＨＡＭＢに掲載された。同業者｛どうぎょうしゃ｝による論評｛ろんぴょう｝の対象｛たいしょう｝となる雑誌に掲載する前段階の大きなステップである。Eric SwensonとHAMBの編集局が我々の非定型的な文書に協力してくれて来た。更に我々は日本とインドの同僚から非常に貴重な情報を入手した。我われはすべての大陸からの情報によってrecommendationを作成すべきである。現在の最も重要な問題はそれを一般の人々と医療関係者にどのように公表するかである。それは旅人やスポーツをするより幅広い聴衆に関連するものである。ＵＩＡＡ ＭｅｄＣｏｍ委員全員が糖尿病のrecommendationを自分の国の関連組織（例えば糖尿病患者組織、糖尿病学会、潜在的には保険）に普及するよう要請された。Recommendationには無料でアクセスできるし、将来も無料でアクセスできるようにする予定である。

5）その他

John McCallが、キリマンジャロのＡＭＳ事故データをみると、実際にその情報を必要とする一般人に我々のrecommendationの情報がうまく伝わっていないと発言した。この問題をどうすべきか議論となった。George RodwayによればPeter BourneがＵＩＡＡのウェブサイトにバイトサイズの情報を供給する仕事を精力的に行っている。これらはよく読まれているし、もっと多くの人々が読むように導くことを期待している。Marieke van Vessemが、我々の聴衆に働きかけるためにソーシャルメディアを使っている者がいるか全員に質問した。オランダ登山クライミング協会フェイスブックは21000人のフォロワーを有しているとのこと。

6）次のＵＩＡＡ ＭｅｄＣｏｍミーティング

○2019年MedComミーティング開催地

次の会長が仕事を開始するまで延期

○2020年MedComミーティング開催地

WMS ISMM会議と連携する。場所はいずれ発表される。

以上が、2108年度のUIAA MedComミーティングの議事概要である。会長の交代に関し、筆者はオブザーバ的参加であったため、何も申し上げることはない。キリマンジャロの営利企業によるヘリコプターレスキューに関しては、日本山岳・スポーツクライミング協会医科学委員会が学ぶべき点が非常に多いと考える。日本では警察や消防が中心となって救助を行っているが、医師がかかわっている地域は限定されている。医科学委員会がどのように連携していくのか、議論すべきであろう。ＤｉＭＭに関しては、新しい規則が発表され次第、それを取り入れた新カリキュラムを日本登山医学会認定山岳医委員会で作成する予定である。

【出席者】

George Rodway（米国、会長）, David Hillebrandt（英国,、副会長）, Buddha Basnyat（ネパール、主催者）, Thomas Küpper（ドイツ）, Dominique Jean（フランス）, Norihiro Kamikomaki（日本）, Shih-Hao Wang（台湾）, John McCall（カナダ）, Johan Holmgren（スウェーデン）, Marieke van Vessem（オランダ）, Rianne van der Spek（オランダ、議事録）, Sundeep Dhillon（英国）, Piotr Szawarski（英国、オブザーバ）, Alexandra Koukoutsi（ギリシャ）, Oliver Reisten（スイス、ICAR）, Urs Hefti（スイス）

【欠席者】

Anna Carceller（スペイン）, Audry Morrison（英国）, Pierre Bouzat（フランス）, Shigeru Masuyama（日本）, Alzamani Idrose（マレーシア）, Daniel Trevena（オーストラリア）, Volker Schöffl（ドイツ）, Peter Paal（オーストリア）, Patrick Peters（ルクセンブルグ）

（登山医科学委員会専門委員　上小牧憲寛）

JMSCA

平成30年度12月
常務理事会報告

日　時　平成30年12月13日㈭
場　所　岸記念体育会館・４階特別会議室
出席者　八木原会長、亀山、髙橋、伊藤、平山各副会長、尾形専務理事、小野寺、水島、相良、村岡、合田、小日向、仙石、蛭田、町田各常務理事、中畠、古屋監事
同席者　西原国体委員長、安井強化委員長

１．議　事

〈来期以降、理事会と常務理事会の所掌分担について〉
業務執行理事７～８名程度（副会長は２～３名）での常務理事会運営と理事については20～25名の範囲か、減少するか、開催は毎月にするか、などについて協議した。

〈東京2020オリンピック選考基準について〉
安井強化委員長から説明があったが、途中で各常務理事から質問があり、混乱した。ＩＦに確認するなどして再度説明することになった。

⑴平成30年度11月常務理事会・議事録の承認について（事前送付済）
異議なく承認された。
⑵国体競技規程の改定について
ＩＦＳＣと同ルールに近づけることが前提だったが、改訂案はそのようになっていないので、再検討となった。
⑶加盟団体特別表彰候者の承認について
大滝潤二（山形）、喜内敏夫（栃木）、角田二三男（群馬）、中村久住（大阪）、京オ昭（広島）、下田泰義（長崎）、古里亜夫（宮崎）、以上、７名承認
⑷日本代表選手表彰候補者の承認について
原田海、野口啓代、土肥圭太、谷井菜月、以上４選手を承認
⑸指導委員会推薦・表彰候補者の承認について
中庭稔、傘木靖、原秀樹（ＪＳＰＯ表彰推薦）、以上３名を承認
⑹第８回日本山岳グランプリ候補者の承認について
馬目弘仁氏を承認。
⑺登山部・個人会員制度推進について
質疑の後、文書発送が承認された。
⑻第１回スピードクライミングジャパンカップ開催について
要項通りの開催で承認。

〈加盟団体調書について〉
各都道府県山岳連盟（協会）の平成30年度総会データを分析した調書の説明。

２．報告事項

⑴平成30年度11月度会計報告
⑴－１　税務調査結果について
⑵山岳スキーポイント制試行について
⑶2019年新春懇談会について
⑷新春顧問・参与会について
⑸第74回国体リハーサル大会要項
⑹「那須甲子雪遊び隊」開催要項
⑺ジュニア普及情報交換会の開催要項
⑻第14回ＢＪＣ開催要項
⑼ＩＦＳＣ－ＥＯ会議報告について
⑽ＩＦＳＣ世界選手権2019スケジュール
⑾アジア選手権2018倉吉大会の報告
⑿2019年スポーツクライミング事業
⒀ＩＦＳＣ国際ルートセッター受講者（２名）推薦について
⒁コカ・コーラＪＯＣ補助・現状報告
⒂30年度ＪＯＣ国際人養成アカデミー修了者（中村正）について
⒃ミズノメンストール賞候補者推薦
⒄女性スポーツ賞候補者推薦
⒅日本スポーツグランプリ候補者推薦
⒆福井・池田町中学校へ感謝状贈呈

３．指導員・審判員　検定結果報告

⑴山岳Ａ級主任検定員　７人合格
①松尾浩志（三重）②石川まゆみ（愛知）③髙木宏（愛知）④井出泰宏（大阪）⑤石田英行（大阪）⑥坂井田博義（大阪）⑦平野直子（千葉）
⑵スポーツクライミング指導員認定（兵庫）
12名合格　①毛利正光②村口遼③小林弘幸④中川慎護⑤清水雅章⑥蔵敷竜治⑦芦田真紀⑧谷口浩二⑨柴田慎吾⑩佐伯和真⑪髙橋桂子⑫西克彦
上記については、異議なく承認された。

４．後援報告、協賛等の依頼について

⑴山の日協議会「山の日フォーラム」後援について
⑵ＦＩＳＥ2019広島大会共催名義について
上記については、異議なく承認された。

５．専門委員会動静
（10月下旬～12月上旬）

⑴国際委員会－１
11月13日㈫　常任委員７名、４名委任
ア）報告事項
・委員長会議（11/12）報告
・ＡＡＣクライマーズミート参加報告
イ）協議事項
①海外登山懇談会「旅して登る」
11/15㈭ 19：00～　オリセン
②来年度の海登研・総会について
③国際委員会の今後の活動について

⑵国際委員会－２
12月５日㈬　常任委員７名、４名委任
ア）報告事項
・海外向けホームページについて
・新春懇談会（１/12、アルカディア市ヶ谷）について
・第８回日本山岳グランプリについて
馬目弘仁氏に決定。
イ）協議事項
①海外登山懇談会「旅して登る」報告
（11/15㈭、オリセン、有料参加者12人、総勢27人）
②来年度の海登研・総会について
③国際委員会の今後の活動について

⑶山岳スキー委員会－１
10月30日㈫　ネット会議
常任９名、１名委任
ア）報告事項
・National Eventのカレンダー申請
イ）協議事項
①来年の日本選手権について
日程）４月６日㈯～７日㈰
会場）栂池高原スキー場
②ポイント制の参加呼びかけについて
③来年度の事業計画、予算について
④世界選手権の代表選考方法について

⑷山岳スキー委員会－２
11月19日㈪　ネット会議
常任８名、３名委任
ア）報告事項
①来年のＩＳＭＦ総会
2019年９月28日　Antalya（Turkey）
②'18/'19シーズンのＩＳＭＦライセンス申請開始（11/15）
イ）報告事項
①来年の日本選手権について
日程）４月６日㈯、７日㈰
会場）栂池高原スキー場
②ポイント制への参加状況
③来年度の事業計画、予算について

⑸山岳共済会運営委員会
11月28日㈬　出席６名、外部１名
①平成30年度加入状況及び会員拡大推進事業について
②広報用ＰＲ動画制作について
③山岳保険の受付システムの改善
④2019年度版「山岳保険」と「共済会栞」について
⑤山岳遭難対策シンポジウムの報告書作成について
⑥ココヘリとモトドコについて
⑦ＪＭＳＣＡメンバー制度について
⑧平成31年度事業計画と収支予算案について
⑨山岳共済会マスコットキャラクターの愛称について
⑩その他
・個人賠償責任保険の請求案件増について
・日山協創立60周年記念の共済会記念事業について
・山岳共済会ＨＰがグーグルクロームで見れないトラブルについて

⑹マーケティング委員会
11月19日㈪　出席４名、欠席２名
ア）報告事項
①リリース配信実績について
②取材対応について
③2019年シーズンＪＭＳＣＡスポンサーについて
④アプルーバル関係（２件）
⑤高校選抜放送予定について
⑥アフロ関係
イ）協議事項
①リリース予定について
②１月以降大会サポートスタッフについて
③写真利用について
④2019年シーズン国内映像における二次使用について
ウ）スケジュール関連について

⑺強化委員会
11月30日㈮　分室　出席６名
ア）協　議
①強化戦略の再考（安井より）
②東京2020オリンピックへ向けた選考基準作成について
③ユース派遣選手選考基準について
④今後のスケジュール
⑤強化委員会の再考と危機管理体制について
⑥コーチングスタッフの追加について
１）報　告
①大会・合宿報告

・リードワールドカップ
・アジア選手権倉吉大会
・アジアユース選手権重慶大会
②第３期オリンピック強化選手 ヒアリング
③第１回ＪＭＳＣＡ委員長会議

⑻指導委員会－１

11月５日㈪　出席12名、委任５名

ア）報告事項
①夏山リーダーパンフレット作成について
イ）検討事項
①登攀技術研修会の合格について
②新指導者制度について
③氷雪技術研修会について
④2018年度ＳＣブロック別研修会における義務研修について
⑤夏山リーダー講習会について
⑥予算検討会（12/１）について
⑦2019年度の事業について

⑼指導委員会－２

12月３日㈪　出席12名、委任５名

ア）検定合格者
①登攀研修会（愛知）の合格者
・山岳Ａ級主任検定員　７人合格
②スポーツクライミング指導員認定（兵庫）12名合格
③新指導者制度について
④夏山リーダー講習会について
⑤2019年度の事業について

⑽遭対委員会－１

10月31日㈪　出席10名、スカイプ７名

ア）協議事項
①冬山レスキュー講習会の要項について
②山岳遭難セーフティーカード（冬山バージョン）について
③夏山リーダーの進捗状況について
④ＵＩＡＡ登山部会出張について
⑤ＳＡＲシンポジウムについて
⑥遭対研修会兼総会について
⑦ＡＶＳＡＲ講習会、事前研修について
⑧平成31年度予算について
⑨ココヘリについて

⑾遭対委員会－２

11月28日㈬　出席９名、スカイプ８名

ア）協議事項
①冬山レスキュー講習会について
②平成31年度予算について
③ＵＩＡＡ登山部会出張報告について
④夏山リーダーの進捗状況について
⑤その他
・ＡＶＳＡＲ事前研修について
・ＡＶＳＡＲ講習会について
・講習会での事故報告

６．その他の重要事項

10月27日～12月２日

⑴登攀技術研修会
10月27日㈯～28日㈰於：愛知
蛭田常務理事

⑵税務調査
10月29日㈪～31日㈬　於：日山協事務局　立元会計士、尾形専務理事、相良・小野寺常務理事

⑶スポーツ国際基盤形成事業第２回情報共有連絡会議　10月30日㈫
於：岸記念体育館　小日向常務理事

⑷第３回理事会
11月４日㈰　於：岸記念体育会館
八木原会長他28名

⑸ＪＯＣ加盟団体会長会議
11月７日㈬　於：品川プリンスホテルクリスタル24　亀山副会長

⑹ＩＦＳＣアジア選手権
11月７日㈬～11日㈰　於：鳥取県倉吉市
八木原会長、平山副会長、村岡常務理事

⑺富士山利用者専門委員会
11月９日㈮於：ホテルルポール麹町
尾形専務理事

⑻（公社）東京都山岳連盟創立70周年記念祝賀会　11月10日㈰
於：アルカディア市ヶ谷　髙橋副会長

⑼ＵＩＡＡ登山部会
11月10日㈯～11日㈰　於：ハンガリー・ブタペスト　青山委員

⑽ＪＳＣ次年度助成金説明会
11月12日㈪　於：日本青年館
小野寺常務理事

⑾専門委員会委員長会議
11月12日㈪　於：岸記念体育会館
常務理事、監事、各委員会委員長

⑿『山と渓谷』創刊1000号感謝の会
11月13日㈫　於：アルカディア市ヶ谷
八木原会長

⒀新館入居説明会
11月14日㈬　於：日本青年会館
尾形専務理事

⒁ＪＳＰＯ評議員連合会幹事会
11月15日㈭　於：岸記念体育会館１階特別会議室　尾形専務理事

⒂海外登山懇談会
11月15日㈭　於：国立オリンピック記念青少年総合センター
八木原会長、澤田委員長

⒃大分県山岳連盟創立70周年記念祝賀会
11月17日㈯　於：筋湯温泉・宝珠屋
伊藤副会長

⒄安全登山指導者研修会（西部地区）
11月17日㈯～19日㈪　於：沖縄・名護岳周辺　八木原会長、仙石常務理事

⒅ギャワリ・ネパール外務大臣歓迎レセプション　11月18日㈰　於：駐日ネパール大使公邸　尾形専務理事

⒆ギャワリ・ネパール外務大臣歓迎レセプション　11月19日㈪　於：ニューオータニイン東京　尾形専務理事

⒇ＩＦＳＣ総会視察でＩＦＳＣ役員来日
11月21日㈬～23日㈷㈮　於：品川プリンスホテル

㉑自然保護委員総会
11月23日（祝金）～24日㈯　於：埼玉県・小川げんきプラザ
亀山副会長、松隈委員長

㉒ＪＳＰＯ競技団体評議員連合会総会
11月26日㈪　於：岸記念体育会館
尾形専務理事

㉓天皇陛下御即位30年奉祝委員会設立総会　11月27日㈫　於：ザ・プリンスパークタワー東京　八木原会長

㉔「第23回ＡＮＯＣ総会（2018/東京）JOC Welcome Reception」　11月27日㈫
於：グランドプリンスホテル新高輪
八木原会長、平山副会長、小日向常務理事

㉕松田雄一さんお別れ会
11月28日㈬　於：京王プラザホテル新宿　八木原会長、尾形専務理事、小野寺常務理事

㉖加須市市長表敬訪問
11月28日（水）　於：加須市役所
平山副会長、村岡常務理事

㉗八王子市市長表敬
11月29日㈭　於：八王子市
小日向常務理事

㉘近畿山岳連盟総合会議
12月１日㈯～２日㈰　於：比良山岳センター　小野寺常務理事

寄贈図書

寄贈本	（株）山と渓谷社	『太陽のかけら－ピオレドール・クライマー谷口けいの青春の輝き』大石明弘著
	（株）山と渓谷社	『山の名著』萩原浩司著
広報誌	ポスティコーポレーション	シューズポストウィークリー 第1532号
雑誌	（株）山と渓谷社	ROCK＆ＳＮＯＷ　Winter Dec.2018
	（株）ネイチュアエンタープライズ	「岳人」No.859
	Fishing Café	Winter 2019 Vol.61
	（株）山と渓谷	「山と渓谷」No.1005
会報	一等三角点研究会	「聳嶺」
	日本武術太極拳連盟	12月No.351
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.527
	La rivista del Club alpino italiano	「Montagne 360」Dicembre 2018
	長野県山岳協会	やまなみ No.231
	やまびこ山想会	やまびこ 第180号
	日本防火・防災協会	地域防災　No.23
	東京野歩路会	「山嶺」Vol.96
	高体連登山専門部	Vol.36
	日本山岳文化学会	日本山岳文化学会論集 第16号

(29) アンチ・ドーピングに関する新体制説明
　12月５日(水)　於：日山協事務局
　小野寺常務理事、角田委員長
(30) ＪＯＣマーケティング活動とヒアリング
　12月５日(水)　於：ＪＯＣ会議室
　尾形専務理事、小野寺常務理事
(31) 全国山の日協議会理事会　12月６日(木)
　於：弘済会館　尾形専務理事
(32) 日本勤労者山岳連盟望年会
　12月７日(土)　於：労山事務所
　八木原会長、尾形専務理事、小野寺常務理事
(33) 栃木県山岳・スポーツクライミング連盟創立70周年記念祝賀会
　12月８日(土)　於：宇都宮　八木原会長
(34) 日本ヒマラヤ協会華甲望年会
　12月８日(土)　於：プラザエフ
　尾形専務理事

表紙のことば

1993年４月16日、スフィンクスの核心部は、私と新郷の２人合わせて94歳というロートル組に託された。頭上には蒼々としたアイスキャップがかぶさり、その基部に続く氷稜はテカテカの蒼氷で、アンカーはスナーグかスクリューしか効かず、スリリングな氷壁登攀を強いられた。息の抜けないジリジリとした攻防で、アイスキャップの上に抜け出て、この核心部は、ロートル２人の激闘で決着がついた。さらにその上にもう１ピッチ固定ロープを延ばすと、スフィンクスの肩に出た。そこは広々としたスノー台地で、Ｃ２（6,700ｍ）とした。Ｃ２からは氷稜越しにシニオルチュー（6,887ｍ）の雄姿が眺められた。（右奥）

（写真撮影者・尾形好雄）

編集後記

明けましておめでとうございます。今年は平成最後の年節目である。協会は60周年記念事業、東京2020オリンピック選手選考に係る事業、昨年動き始めた「夏山リーダ-制度」の実施等多くの課題があり、協会挙げて総意と知恵・工夫が必要とされる。いずれにせよ会長の年頭挨拶にある様に、情報の発信を「丁寧に、積極的に、スピーディーに」展開してゆかなければならない。今年も宜しくお願いします。

（広報担当 水島彰治）

一般財団法人 日本トレイルランニング協会

〒252-0184
神奈川県相模原市緑区小渕1545-1
☎042-687-4011　FAX 042-687-3980
E-mail kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp

NPO法人 北丹沢山岳センター
神奈川県・山梨県東部トレイルラン連絡協議会
事務局　〒252-0184　神奈川県相模原市緑区小渕1545-1
TEL 042-687-4011　FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp
- 北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会
- 陣馬山トレイルレース実行委員会
- 道志村トレイルレース実行委員会
- 八重山トレイルレース実行委員会
- 東丹沢宮ヶ瀬トレイルレース実行委員会
- 上野原秋山トレイルレース実行委員会

大会々長　杉本憲昭

登山月報　第 598 号

定　価　110 円（送料別）
予約年間　1,300 円（送料共）
昭和 45 年 12 月 12 日
第三種郵便物認可
（毎月 1 回 15 日発行）
発行日　平成31年 1 月15日
発行者　東京都渋谷区神南 1-1-1
岸記念体育会館内
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電　話　03 － 3481 － 2396
ＦＡＸ　03 － 3481 － 2395

山岳雑誌 岳人
山と人、時代をつなぐ「岳人」（がくじん）

2月号 発売中

【特 集】地図を楽しむ
★モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて発売中！
毎月15日発売　価格815円(+税)

年間購読がおすすめです。
購読割引　送料無料　限定品プレゼント
年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。
通常本体価格12冊 ~~9,780円~~(+税) → 年間購読なら12冊 8,965円(+税)
1年間で815円 1冊分無料！

年間購読特典　岳人オリジナルグッズをプレゼント！
岳人ミニワレット（2個セット）
サイズ：9×10cm
※カラーはお選びいただけません
さらに
はじめてお申し込みの方に
岳人ピンバッジ
ご継続の方に
特製マガジンBOX

年間購読のお申し込み　WEB https://www.gakujin.jp/　全国のモンベルストアでも受付中！
お問い合わせ　モンベルポスト　0120-982-682／TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

あなたを守る。
あしたを作る。
三井住友海上

損害保険と聞いて、
なにを思い浮かべますか？

ケガ、災害、事故…日々の中で起こりうるリスクをカバーする。それは私たち三井住友海上の重要な任務ですが、すべてではありません。たとえば同じ自動車保険でも、暮らしの変化や自動車の進化を見つめて改善を続けること、宇宙開発や再生医療など、まだ世界にない保険を新しく作ることで社会の前進をサポートすることも、とても大切な役割です。変わらない一日に寄り添い、より豊かな明日を実現したい。だから私たちは、守ることと作ること、その両方を繰り返しながら前へ歩み続けます。

日山協 山岳共済会 〒170-0013 東京都豊島区東池袋3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397
E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp
月曜日～金曜日 10:00～17:00（祝日除く）

携帯からも資料請求ができます。
公益社団法人 日本山岳・スポーツクライミング協会
携帯サイト（www.jma-sangaku.or.jp/mobile/）

WEBからもお申込みいただけます（www.sangakukyousai.com）